

教材活用例(1) 「700さいの大すぎ」

〔小学校低学年 主題：わたしがそだつ町 内容項目：4の(5)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—清神社の大杉—について〉

清神社の石段を登りつめた本殿の前，境内の東西に等間隔をおいて，大杉が6本そびえている。推定樹齢700年とされていたが，平成11年9月，西日本を中心に吹き荒れた台風18号で，「観音杉」と呼ばれていた大杉が中途折損して，横臥した。その折に，樹齢を数えたところ，700年を越えていることが確かめられた。この杉は，戦国時代から，歴史の生き証人として，吉田町を見守り続け，多くの人に親しまれ，崇敬されている。昭和43年，吉田町天然記念物に指定された。

奈良時代	大杉が植えられている清神社は，京都祇園社の荘園吉田荘の鎮守として創建された。
戦国時代	境内に杉が植えられた。
元禄6年(1693年)	現在の社殿が造立された。
昭和43年(1968年)	吉田町天然記念物に指定された。
平成11年	西日本を中心に吹き荒れた台風18号で，「観音杉」と呼ばれていた6本のうちの1本の大杉が中途折損して，横臥した。



(イ) 4コマ絵

主人公とおじいさんの散歩から，清神社の大杉に出会う話を設定した。おじいさんから大杉についての話を聞き，見慣れている大杉の生命力や力強さに初めて気付くとともに，大杉に対する愛着や親しみを感じる主人公の気持ちを中心とし，起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	郡山公園や清神社におじいさんと散歩に出かける。	大きな杉の木と出会う。そこでおじいさんから，700年も生き続けていることを聞き，びっくりする。	おじいさんの話から空に向かって一直線に伸びる大杉は，吉田の人によってずっと守られてきたことを知る。	友達と遊ぶ場面では，ぜひこの大杉を友達に見せたいと思い，遊びに行ってみないかと誘う。

イ 資料の解説

【作成の要点】

低学年の発達の段階を考えると、ようやく自分の住む地域という考えがもてるようになってくる頃である。本資料は、自分が住んでいる身近な地域にある神社の境内にある杉の木に焦点をあてる。いつも何気なく目にしている木であるが、700年もの永い間この地域に生き続け、多くの人々の心のよりどころになっていることに気付くという内容にしたものである。

郷土愛を扱った本資料をきっかけに、2学年の学習活動だけでなく、今後3学年「わたしたちのまちはどんなまち」社会科、4学年「郷土につたわる願い」社会科、5、6学年「文化財を描こう」図画工作科、6学年「戦国時代」社会科など、地域の文化にふれる体験や学習活動、地域行事との関連を図りながら、地域社会と接点をつくることができると考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

平成11年9月24日、台風18号で一本（周囲4.8m、樹高45m）が根元14mを残して折れ境内に倒伏した。横臥した「観音杉」は、幹回り約4.8メートル、高さ45mで、二番目の高さだったが、下から3分の1のところが、地響きを立てて折損した。境内は玉垣に囲まれて、北側には本殿・相若社ほか、東には神楽殿、西に神輿殿とお蔵、南には民家があり、大災害が予想された。しかし、被害はなく不思議がられ、誰からともなく「身代わりの杉よ」と言われた。残った部分に倒木の危険があり、やむなく伐採することになり、平成11年師走、伐採清祓祭を斉行し、多くの皆さんに見守られる中で、石州在の木匠の手により、静かに倒伏された。根元部分を約1メートル掘り下げて、回り約5.5m、厚さ約30cmを切り出して据え付け、平成12年8月10日、毛利元就公郡山入城の日を選んで竣工清祓祭を斉行、「神木殿」と名付けて、永く後世に残すことになった。また、大杉がある境内は、地域の人によって毎日きれいに掃除されている。



ウ 資料全文

「700さいの大すぎ」

「おーい ひろし。 おじいちゃんとおおりの山こうえんに さんぽに 行かないか。」

「うん おじいちゃん。おおり山こうえんなら、せいかつかの べんきょうで 行ったことがあるよ。学校の すぐうらだよ。」

ひろしは なんだか わくわく してきた。

おおり山こうえんに つくと まっさきに てんぼうだいへ あがった。ひろしは、ここから見る吉田の町が 大すぎだった。

「ひろし。おじいちゃんより もっとおじいちゃんが いるんだよ。すがじんじゃに あいに行こうか。」

「すがじんじゃは お正月に行ったことがあるけど……。おじいちゃんのおじいちゃんっていなかったけどな。」

すがじんじやに ついたが なにもなかった。ひろしは すこしがっかりした。

「これが、おじいちゃんのおじいちゃんだよ。」

ひろしのおじいさんは、にっこりして大きな木の前に 立ちどまった。

大きな木が 目の前に5本あらわれた。

「うわあ。でっかい木だな。なんていう名前の木なの。」

「大きいすぎの木だから 大すぎと いうんじやよ。」

「ひろし、この木は、なんさいだと おもう。」

「おじいちゃんのおじいちゃんだから 100さいくらいかな。」

ひろしは、じしん まんまんに こたえた。

「は は は。ひろし この大すぎは おじいちゃんが子どものころから ずっと ここに あったんだ。ここで 友だちと いつも よく あそんだもんじや。」

「なつの あつい日も ふゆの さむい日も たいふうや ゆきや 大あめにも まけず なんと700ねんも ここに 生きている木なんじや。だから 700さいじや。」

ひろしは、なんだか ふしぎな きもちになった。

「ひろし おじいちゃんと手をつないで この木をつかまえられるか やってみよう。」

ひろしは おじいちゃんとだったら 手をつなげるかなとおもって おもいきり 手をのぼしたが まったく とどかない。おじいちゃんのすがたは この木ですっかり 見えなくなった。

「ひろし ゆっくり 大すぎのうえのほうを 見てごらん。」

青い空に まっすぐ 一ちよくせんにのびている すぎのてっぺんは、もう空に とどきそうなくらいだった。大すぎのはっぱや えだのあいだから たいようのやさしい光が さしこんでいた。

ひろしは そっと大すぎを さわった。木のかわをよく見ると たてに大きくわれ そのわれ目に ゆびがはいりそうで ごつごつとしていた。上のほうには カナブンやセミがたくさんあつまって 楽しそうに 休んでいた。大すぎも にっこりわらっているように見えた。

「おじいちゃんが生まれる ずっと前から この吉田の町の人たちや こおり山にすむ どうぶつや 虫たちを 700年ものあいだ やさしく見まもっているんじや。」

「この木たちを見ると なんだか元気がわいてくるんじや。」

おじいちゃんは、ゆっくりとベンチに こしをおろした。

「ひろし ここから見てごらん。5本の大すぎが話をしているように見えんか。」

木のねもとの まわりも きれいにはかれ 草一つない。ちいきの人が毎日 きれいにして まもりつづけていることを おじいちゃんがおしえてくれた。

ひろしは しばらくじっと5本の大すぎを見ていた。

「おーい ひろしくん。あしたの土よう日 どこかへ あそびに いこうよ。」

「どこが いいかな。そうだ みんな すぐ近くに とっておきの場所があるんだ。みんなで行ってみようよ。」

そういって ひろしは、にっこり わらった。



エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の大杉に対する思いに共感し、郷土への親しみや愛着をもたせる展開
～ 役割演技を生かした指導 ～

(ア) 主題名 わたしがそだつ町 4ー(5)

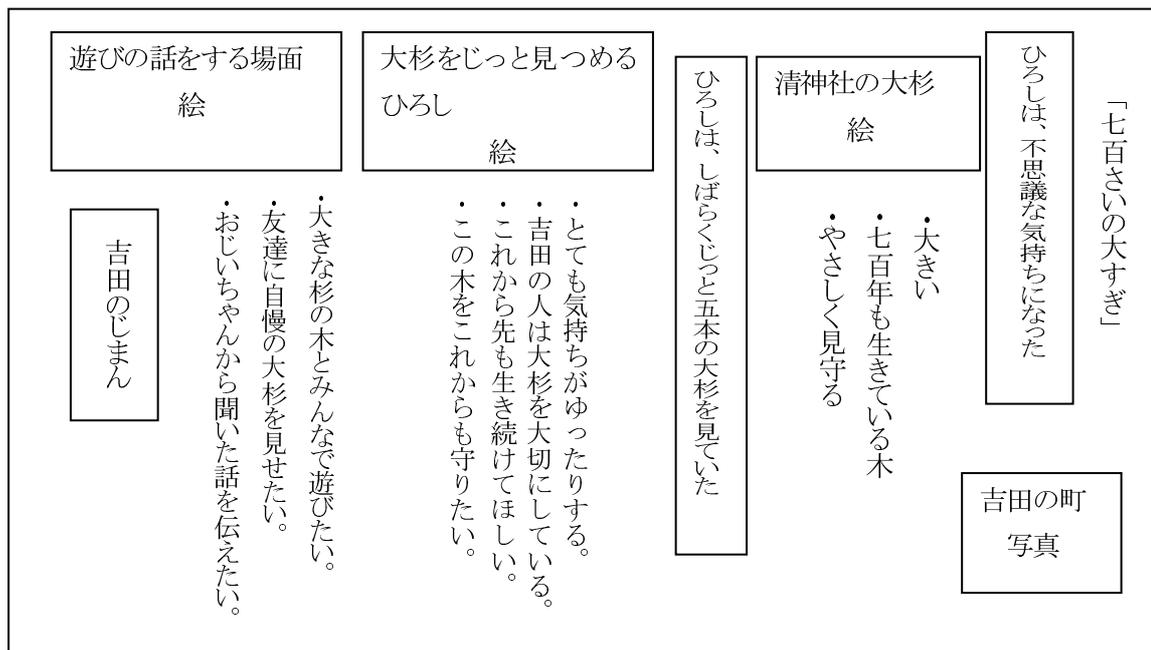
(イ) ねらい おじいさんの話や大杉に触れることにより、清神社の大杉に親しみを感じていく主人公の気持ちを考えるを通して、生活している吉田の町の植物や自然に愛着を深め、親しみをもとうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「700さいの大すぎ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 ここはどこクイズをする。	○ これは、どこにあるでしょう。	○ 資料に興味や関心をもたせる。
展開	2 資料を聞いて考える。 ○ 700年もこの吉田に生きている大杉の話聞いたひろしの気持ちを考える。 ○ 大杉が地域の人に守られている話を聞いた後に、じっと大杉を見つめるひろしの思いを考える。 ○ 友達に大杉を見せたいひろしの気持ちを考える。	○ 700歳の木と聞いてひろしは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・大きな木だな。 ・700年も生きている。 ・夏も冬も負けずに生きている。 ○ おじいさんの話を聞いた後、ひろしは、じっと5本の杉をどんな気持ちで見ているのでしょうか。 ・なんだか気持ちがいい。 ・吉田の人は杉を守っている。 ・これからも生きているほしい。 ・この木をこれからも守りたい。 ◎ ひろしが友達に、「とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。」と言ったのはどうしてでしょう。 ・杉の木とみんなで遊びたい。 ・友達に自慢の杉を見せたい。 ・おじいさんから聞いた話をみんなに伝えたい。	○ 清神社の様子や「700年」がイメージできるように当時の人々の生活の絵を紹介する。 ○ 最初がっかりした気持ちと対比させる。 ○ よしずで作った円周5mの幹を手で囲ませ、杉の大きさのイメージをもたせる。 ○ ひろしの杉に対する親しみや愛着の気持ちを、書く活動を通して気付かせる。 ○ 「とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。」と言うひろしと友達のやりとりを役割演技を通して、ひろしの思いに共感させる。 ☆ 役割演技により、主人公の杉に対する愛着や親しみについての共感的な理解を深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 身の回りにある古くから残っているものや、これからも守りたい吉田の自慢について話し合おう。	○ 吉田町の伝統行事や地域の人々の取組にも目が向くように補助発問をする。
終末	4 吉田の自然や文化をVTRで見ながら、今日の学習を深める。	○ 吉田の町や自然のVTRを見よう。	○ 吉田の町には、みんなを元気づけたり、大切に守り続けたい自慢なひと・もの・ことがたくさんあることを感じさせる。

(カ) 板書例



【板書の構成】

板書は、おじいさんと散歩に出かけ、700歳の大杉に出会った主人公が少しずつ親しみや愛着を感じていく思いが視覚的にとらえられるようにする。そのためには、児童の発言を順番に全て書くのではなく、分類、整理、多様さを構造的に示すようにする。

低学年の児童が教材を理解しやすいように、紙芝居風に提示した場面絵を活用しながら、分割して掲示していく。また、発問に関連するキーワードを掲示し、場面絵とセットで書き、分類、整理する。その際、親しみや愛着にふれた発言を赤色で示す。

終末では、中心発問場面の板書のとなりのスペースをスクリーンとして活用し、板書の一つとして、吉田の自然や文化、行事をビデオで見せるコーナーを設定する。

(2) 活用のポイント

低学年の発達の段階を考え、本資料の主人公に重ねての大杉に対する親しみや愛着の気持ちを考えさせることが大切である。そのために、発問や表現活動（主人公になりきった役割演技）、資料提示の工夫を通してねらいに深く迫ることができると考える。

ア 発問の工夫

主人公のひろしの大杉に対する気持ちの変容を共感的に考えさせるため、3つの発問を「しばらくじっと見ていた。」「とっておきの場所」をキーワードとして、大杉がおじいさんを含め、吉田の町の人にとって心のよりどころになっていることを感じ取らせたい。

イ 表現活動の工夫（役割演技）

友達を大杉のある場所へ遊びに誘う場面で、児童に主人公の役割を与え、即興的に演技することで、道徳的価値に対する一人一人の感じ方や考え方が明確になり、実感的な理解につながるものと考えられる。

ウ 資料提示の工夫

低学年の児童が教材に興味関心をもてるよう、中心的な場面を分割しながら紙芝居のように提示する。そのことが、低学年の児童の理解を手助けすることになる。また、700年生き続けた大杉の年月の長さが実感できるよう配慮したい。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開前段では、清神社についてがっかりしていた主人公が「700年も生き続けている大杉」を初めて知り、「700年も生きていてすごい。」「台風や大雪にも耐えていてすごい。」という気持ちになった主人公の思いに共感できた。

また、おじいさんと手をつないで大杉を捕まえる場面では、よしずで作った円周5mの幹を手で囲ませ、大杉の大きさのイメージをもたせた後に、「おじいさんの話を聞いた後、ひろしはじっと5本の大杉をどんな気持ちで見ていたのでしょうか。」の発問を行った。「ぼくが、大人になっても大杉に生き続けてほしい。」「大杉のために何かし

てあげたい。」「虫たちも集まってきて、自然っていいな。」「ぼくも遊んでみたいな。地域の人が掃除しているからきれいなんだね。」「元気が出て、うれしくなった。がんばってみたいくなって、元気が出た。」といった自然や郷土への親しみや積極的に関わろうとする能動的な側面にふれた心情に共感できた。

イ 表現活動の工夫（役割演技）

中心発問の、「ひろしが友達に『とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。』と言ったのはどうしてでしょう。」では、役割演技を行い、セリフの後に「どうして?」と問うた。主人公が感じた郷土への親しみや愛着を「ブランコも滑り台もないけど、友達にも大杉を見せて、一緒に遊びたい。」「おじいさんから聞いた話をしてあげたい。」「700年も生きている木を見せて、みんなに元気になってほしい。」という意見が出された。児童の考えや思いを役割演技を通して交流することで心の安らぎやしみじみとした情感に思いを寄せることができた。

ウ 資料提示の工夫

導入では、写真を見せながら「ここはどこ!」と身近な清神社の大杉に興味関心を高めることができた。

展開では、場面絵を活用し、紙芝居風に範読した。板書にも活用したことで状況がつかみやすかった。また、700年前の様子を昔の絵を提示したことにより、「えーそんなときから吉田にあったんか。」など、700年の歳月がつかみやすくなった。

終末では、吉田の町には、みんなを元気づけたり、大切に守り続けたりしたい自慢なひと・もの・ことがたくさんあることを具体的な写真を活用してスライドショーで提示した。吉田の自然や文化、行事について改めて親しみや愛着を感じさせることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

本学年の児童は、昨年度生活科で「春を見つけに行こう」「秋を見つけに行こう」など郡山

公園や清神社を探検している。また、今年度の遠足では、清神社を含めた郡山でフィールドワークを行っている。

第3学年では、社会科「わたしのまちはどんなまち」という単元で、地域のよさを見つける活動を行い、この「700歳の大杉」を含め、自然のすばらしさや親しみや愛着を感じることができる。また、終末で見せたとんどや一心祭りなどの地域行事や花いっぱい運動を行っている地域の人、あいさつ運動に立ってくださっている地域の方など、折にふれて本学習と関連をもたせていくことができる。

(5) 心のノートを活用

本授業では、終末に「心のノート」PP.88-89の「あなたがそだつ町」をモデルに、具体的な吉田の町を素材としたひと・もの・ことをビデオで見せる場面を設定した。その画像にも、「地域の中での体験を広げる」「自分の体験と重ねる」「今、生活しているこの吉田の町について、もっと知りたい」という思いが膨らむように心のノートの絵に添えてある言葉を参考にテロップを入れて提示した。

今後、本授業と関連をもたせた他教科、領域の学習のまとめとして、「心のノート」PP.90-91の「あなたの町のすてきなところをしょうかいする新聞を作ろう」を参考にする。その新聞作りを通して、自分の町を意欲的に調べ、吉田町の文化や生活に親しむことができるよう、行事に参加した時の思いや考えを「書く」ことを通して、じっくり深めていく。そして、「わたしをそだてる町」に一層愛着をもたせる。

